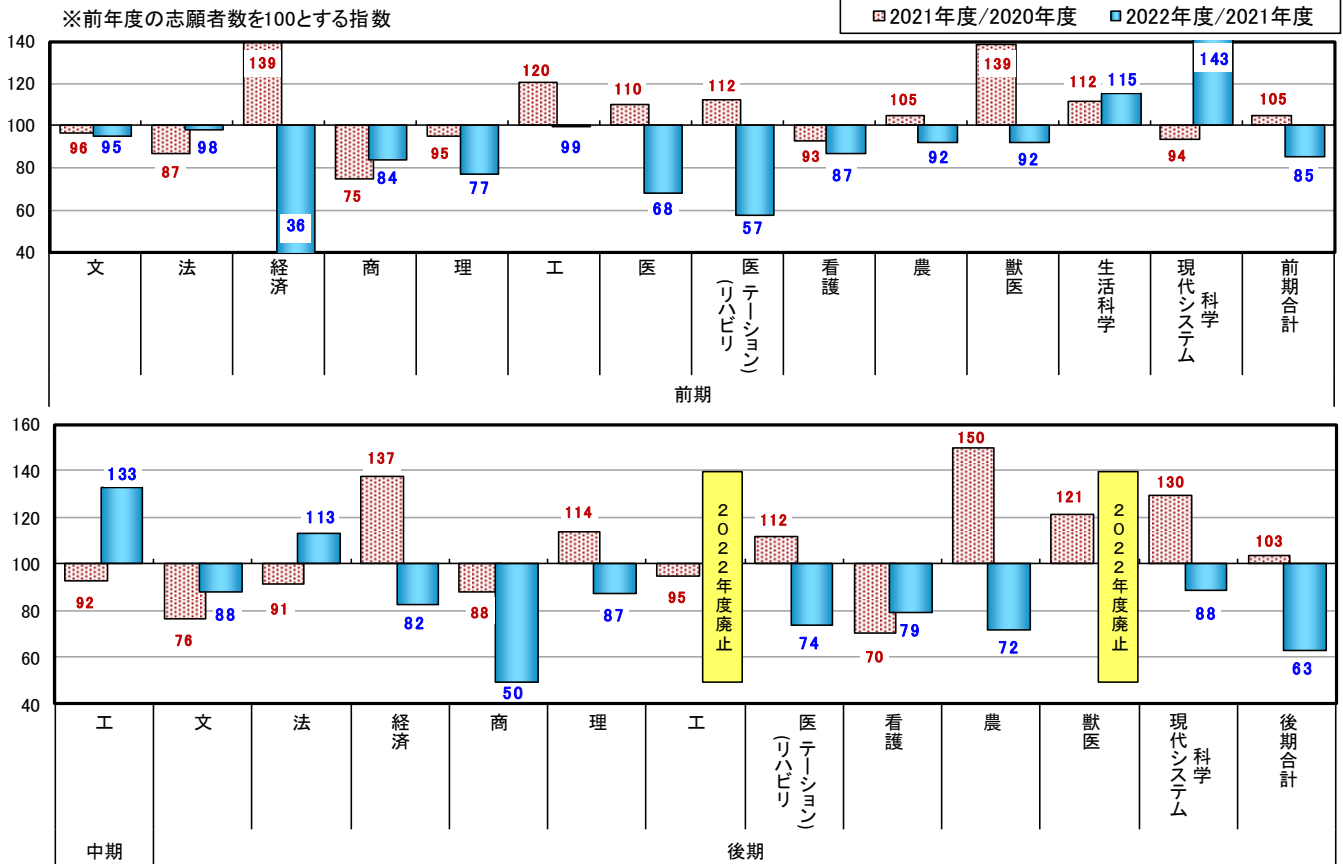


大阪公立大：統合により志願者数は国公立大で全国最多 前期：-806人 中期：+1,543人 後期：-1,338人



※2021 年度、2020 年度は旧「大阪市立大」と旧「大阪府立大」の該当学部の志願者数合計との比較

主な入試変更点 大学統合：旧「大阪市立大」と旧「大阪府立大」が統合し、大阪公立大へ
 旧「大阪市立大」(文、法、経済、商、理、工、医、生活科学)
 +旧「大阪府立大」(現代システム科学域、工学域、生命環境科学域、地域保健学域)
 →大阪公立大(現代システム科学域、文、法、経済、商、理、工、農、獣医、医、看護、生活科学)

COMMENT ※()内の数値は志願者数の前年度対比指数

2022 年度大阪公立大の志願者数と 2021 年度の旧「大阪市立大」と旧「大阪府立大」の志願者数合計を比較した。大学全体では、志願者数は 13,188 人で 601 人(96)のやや減少だが、全国の国公立大で最大の志願者数となった。募集人員も 96 人(4%)のやや減少と志願者数とほぼ同じ減少率で、志願倍率も 5.42 倍→5.39 倍にごくわずかなダウン。前期は 806 人(85)の大幅減少、募集人員は 41 人(2%)の微減だったので、志願倍率は 3.1 倍→2.7 倍にダウン。共通テストの平均点ダウンの影響と旧大阪市立大と旧大阪府立大の 2 大学で幅広い学力層の志願者を集めていたのが、統合により志願者の学力層の幅が狭まってしまったことも影響。中期は工のみの募集だが、1,543 人(133)の大幅増加、募集人員は 9 人(2%)の微減だったので、志願倍率は 10.3 倍→14.0 倍にアップ。従来からの近畿地区の上位大学前期志願者からの併願先として狙われたことに加えて、旧大阪府立大・工学域が中期のみの募集だったのが、前期と中期に分割された結果、従来はなかった新たな学内併願者が生まれたことも影響。後期は 1,338 人(63)の大幅減少で、共通テストの平均点ダウンの影響から目標ラインの低い大学への志望変更の影響が見られた。募集人員も 46 人(15%)の大幅減少だったが、志願者数減少率が上回り、志願倍率は 11.4 倍→8.4 倍にダウン。なお、前年度 802 人の志願者数だった旧大阪市立大・工(後)が募集廃止となった影響もあったが、これを除いても 536 人(81)の大幅減少。

- <前期日程>
- 文(95)は、旧大阪市立大・文との比較で、やや減少で3年連続減少。
 - 法(98)は、旧大阪市立大・法との比較で、微減で2年連続減少。募集人員が10人(7%)やや増加したので、志願倍率は2.6倍→2.4倍にダウン。
 - 経済(36)は、旧大阪市立大・経済と旧大阪府立大・現代システム科学域(マネジメント学類)の合計との比較で、減少率60%以上の激減。募集人員も65人(26%)大幅減少だが、志願倍率は3.8倍→1.8倍にダウン。前年度に旧大阪市立大・経済が22%の大幅増加、旧大阪府立大・現代システム科学域(マネジメント学類)が64%の激増だった反動と2大学で倍広い学力層の志願者を集めていたのが、統合により志願者の学力層の幅が狭まってしまったことが大きく影響。
 - 商(84)は、旧大阪市立大・商との比較で、2年連続大幅減少。志願倍率は2.2倍→1.8倍にダウン。
 - 理(77)は、旧大阪市立大・理と旧大阪府立大・生命環境科学域(理学類)の合計との比較で、大幅減少。募集人員も27人(12%)減少だが、志願倍率は2.6倍→2.3倍にダウン。2大学で倍広い学力層の志願者を集めていたのが、統合により志願者の学力層の幅が狭まってしまったことが影響。学科別では、6学科中(数)が2.7倍で最も高倍率、一方で(化)が2.0倍で最も低倍率。
 - 工(99)は、旧大阪市立大・工との比較では、前年度大幅増加の反動はなく前年度並。募集人員は44人(20%)の大幅増加で、志願倍率は3.9倍→3.3倍にダウン。学科別では、12学科で(情報工)が7.2倍で最も高倍率、一方で(マテリアル工)が2.0

倍で最も低倍率。

- 医(医)(68)**は前期のみの募集で、旧大阪市立大・医(医)との比較では、減少率30%以上の大幅減少。志願倍率は2.8倍→1.9倍で2倍を下回った。共通テストの平均点ダウンの影響で、目標ラインがより低い大学への志望変更の影響があった。
- 医(リハビリテーション)(57)**は、旧大阪府立大・地域保健学域(総合リハビリテーション学類)との比較では、減少率40%以上の大幅減少。ただし、募集人員は23人(43%)の大幅減少で、減少率は志願者数の減少率と同じで、志願倍率は3.2倍と変化はなかった。2専攻の志願倍率も(リハビリテーション/理学療法学)が3.3倍、(リハビリテーション/作業療法学)が3.1倍と大きな差はなかった。
- 看護(87)**は、旧大阪市立大・医(看護)と旧大阪府立大・地域保健学域(看護学類)の合計との比較では、大幅減少で3年連続減少。募集人員も5人(6%)のやや減少で、志願倍率は2.5倍→2.3倍にダウン。
- 農(92)**は、旧大阪府立大・生命環境科学域(応用生命科学類)と旧大阪府立大・生命環境科学域(緑地環境科学類)の合計の比較では、2年連続増加の反動で減少。志願倍率は3.8倍→3.5倍にダウン。学科別では、3学科で(生命機能化)が4.3倍で最も高倍率、一方で(緑地環境科学)が2.6倍と最も低倍率。
- 獣医(92)**は前期のみの募集で、旧大阪府立大・生命環境科学域(獣医学類)との比較では、前年度大幅増加の反動と共通テストの平均点ダウンの影響で減少。志願倍率は、3.9倍→3.6倍にダウン。
- 生活科学(115)**は前期のみの募集で、旧大阪市立大・生活科学との比較では、大幅増加で2年連続増加。募集人員も14人(15%)の大幅増加で、増加率は志願者数の増加率と同じで、志願倍率は3.5倍と変化はなかった。4募集単位別で、(食栄養)〈均等型〉が4.0倍で最も高倍率、一方で(食栄養)〈理数重点型〉が3.2倍で最も低倍率
- 現代システム科学域(143)**は、旧大阪府立大・現代科学システム科学域(知能情報システム学類)と旧大阪府立大・環境システム科学域(知能情報システム学類)と旧大阪府立大・地域保健学域(教育福祉学類)の合計との比較では、増加率40%以上の大幅増加。募集人員も11人(7%)のやや増加だが、志願倍率は2.9倍→3.9倍にアップ。募集単位別では10募集単位で、(学域募集)〈英・国型〉が7.0倍と最も高倍率、一方で(学域募集)〈英・数型〉が2.6倍と最も低倍率。

＜中期日程＞

- 工(133)**は、旧大阪府立大・工学域との比較では、大幅増加。募集人員は9人(2%)の微減だったので、志願倍率は10.3倍→14.0倍にアップ。学科別では、12学科で(建築)が74.8倍、(都市)が27.2倍、(情報工)が23.6倍、(航空宇宙工)が21.2倍の4学科が志願倍率20倍以上、一方で(電子物理工)は7.7倍で最も低倍率と学科間の競争に大きく差がついた。

＜後期日程＞

- 文(88)**は、旧大阪市立大・文との比較で、減少で2年連続減少。
- 法(113)**は、旧大阪市立大・法との比較で、3年連続減少の反動もあって増加。しかし、募集人員が5人(25%)の大幅増加だったので、志願倍率は17.3倍→15.6倍にダウン。
- 経済(82)**は、旧大阪市立大・経済との比較で、前年度37%の大幅増加だった反動で大幅減少。募集人員は5人(11%)の増加なので、志願倍率は6.5倍→4.8倍にダウン。
- 商(50)**は、旧大阪市立大・商との比較で、半減で3年連続減少。志願倍率は5.6倍→3.9倍にダウン。
- 理(87)**は、旧大阪市立大・理と旧大阪府立大・生命環境科学域(理学類)の合計との比較で、前年度増加の反動で減少。募集人員は2人(4%)のやや増加なので、志願倍率は13.1倍→11.1倍にダウン。2大学で倍広い学力層の志願者を集めていたのが、統合により志願者の学力層の幅が狭まってしまったことが影響。学科別では、6学科で(数)が17.3倍で最も高倍率、一方で(生物化)が2.7倍で最も低倍率。
- 医(リハビリテーション)(74)**は、旧大阪府立大・地域保健学域(総合リハビリテーション学類)との比較では、減少率26%の大幅減少。募集人員も2人(33%)の大幅減少で、募集人員の減少率が上回ったので、志願倍率は18.5倍→20.5倍とアップした。2専攻の志願倍率は(リハビリテーション/作業療法学)が21.0倍、(リハビリテーション/理学療法学)が20.0倍と大きな差はなかった。
- 看護(79)**は、旧大阪府立大・地域保健学域(看護学類)との比較では、2年連続大幅減少。募集人員は5人(33%)の大幅増加だったので、志願倍率は7.8倍→4.7倍にダウン。
- 農(72)**は、旧大阪府立大・生命環境科学域(応用生命科学類)と旧大阪府立大・生命環境科学域(緑地環境科学類)の合計の比較では、2年連続増加の反動で大幅減少。志願倍率は8.3倍→6.0倍にダウン。学科別では、3学科中(生命機能化)が7.4倍で最も高倍率、一方で(応用生物科学)が4.8倍と最も低倍率。
- 現代システム科学域(88)**は(学域募集)のみで、旧大阪府立大・現代科学システム科学域と旧大阪府立大・地域保健学域(教育福祉学類)の合計との比較では、前年度大幅増加の反動で減少。志願倍率は8.9倍→7.9倍にダウン。